Precious Words from kageki Shimoda

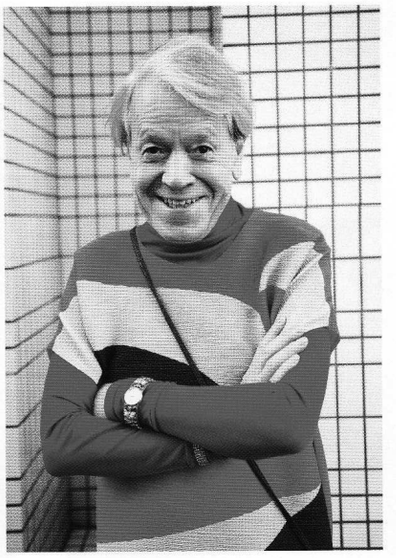
はな世代に贈る

言葉の花束

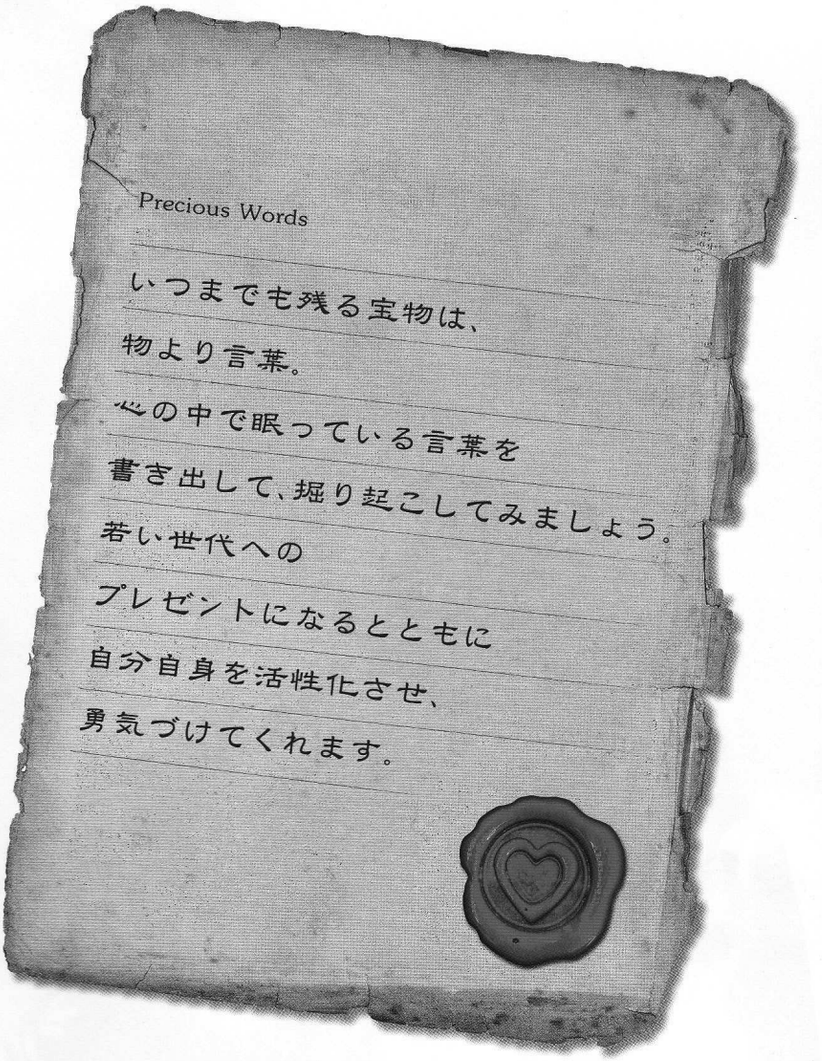
志茂田 景樹

「人生、今が出発点」——
何かを始めるのに、
遅すぎるということはないのです。
何歳になっても、
あなたはあなたらしく輝いて生きられます。
時に悩み、不安を抱えるあなたへ届けたい、
僕からのメッセージ。

写真　宗野 歩



志茂田景樹
1940年生まれ。40歳のとき「黄色い牙」で直木賞を受賞し、ミステリー、歴史、エッセイなど多彩な作品を発表。1996年、自作の絵本や童話を発行する出版社、KIBA　BOOKを立ち上げる一方で、1998年より子どもたちへの絵本の読み聞かせ活動を全国で行う。2010年から開始したツイッターでは、心に響く名言や人生相談への的確なアドバイスが共感を呼び、多くの愛読者がいる。



親や年の離れた先輩から言われた言葉というのは、後になって身に沁みるものです。短い言葉であっても、人生をきちんと築いてきた経験から語られる言葉には、それなりの含蓄がある。その言葉を守れば、それなりの結果が出る宝物じゃないでしょうか。僕の場合で言えば、30代で連夜のように飲んでいたとき、ある朝父が振り返り「一生は一瞬だからな」とつぶやいた。その一瞬だからこそ、僕の心に刺さった言葉。それはずっと、僕の宝物になったんです。

言われる立場から、言う立場になっているブリリアント読者の皆さんには、一度、気になった言葉や心に残っている言葉、普段は忘れている言葉を書き出し、掘り起こしてみることをおすすめします。

日記でも、簡単な自分史でもいいんです。思いついたときに書いていると、これだ！という言葉がハッと出てくるんですよ。書くことがない、という人は、現時点の身辺を見て書こうとするのではなく、自分の人生の道のりを振り返るだけでもいい。それは大いに価値がある、素晴らしいことだと思います。

今まで守ってきた言葉は、ふだんはあまり意識していないことが多い。ちゃんと思い出の網で心の底をたぐって、取り出してみるんです。そうすると、いつか若い人の身や心に沁みる、言葉になります。

本人はあたりまえだと思っていても、他の人にとっては、とても素敵な言葉かもしれない。とても耳に痛い言葉なのかもしれない。耳に痛いからこそ、有益な言葉であったりするものです。今、そういった言葉を遠慮せずに、どんどん若い人に伝えていくことが求められているんじゃないでしょうか。

若い人を叱りたいときは感情的になるのではなく、そういう言葉を持ち出してみる。自分の体験も合わせて話をしたら、真剣に聞いてくれます。自分の中にしまっておくだけでは、宝の持ち腐れになってしまうと思います。

忘れていたいろいろな言葉を思い出すことは、人生の活性化にもつながる。言葉の宝は人に伝えると同時に、自分の心や身体にも生かせます。自分の中に秘蔵していた宝を、どんどん取り出してみてください。改めてこうしようという気持ちになって、アンチエイジングにもつながっていきますよ。